

若手記者だからできる？

消費喚起にメニュー提案、プロデュースに紙面づくり

日本農業新聞がんばれ

自分の「確かな目線」おもしろさ産む

これで三回目になる「日本農業新聞元記者としての若手へのエール」。今回でひと息したいと思います。

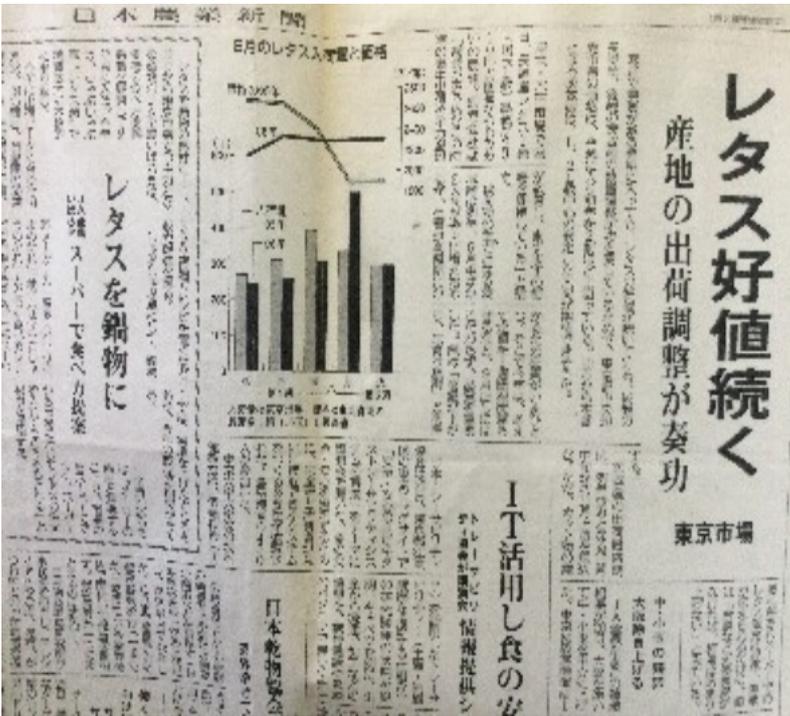
今回は、需要期でない作物に対する消費喚起策の記事（レタス）、それから、産地で前進化して多く獲れた作物をどう消

費してもらおうかという事例（芽キャベツ）。芸能記者時代に、ボランティア活動をするグラビアアイドルを、別で取材した車いすビリヤードの全国大会とコラボする手助けをして記事にした事例に、一番在籍が長かった、整理部として

の魅せる見出しづくり数例と、新会社（2002年8月1日）の一面担当のやりがいと苦労、そしてお疲れさんの呑み会で流した涙についてふれて筆をおき、次の人生のステップアップにします。少しの間おつきあいください。

まず、レタスの記事です。よくお笑い芸人が「食えない」時期に、「レタスが安い冬場にしゃぶしゃぶにして〜」みたいなテレビ番組も観たりますが（いかがでしょう）、まさにその記事なんです。産地のJA経済連（当時）の担当の方が、ごまだれなどで味付けして「レタスしゃぶしゃぶ」でシーズンでないときに消費者にあえて食べていただきたい！という思いを、レタスの相場記事の横に囲み記事にしました。

この記事には後日談が。



レタスを鍋物の食材に。300店舗でレシピを置くなど、販売促進を図る。あり、今年の販促に期待がもてる。しゃぶしゃぶ風に、調味する。

レタスを鍋物に

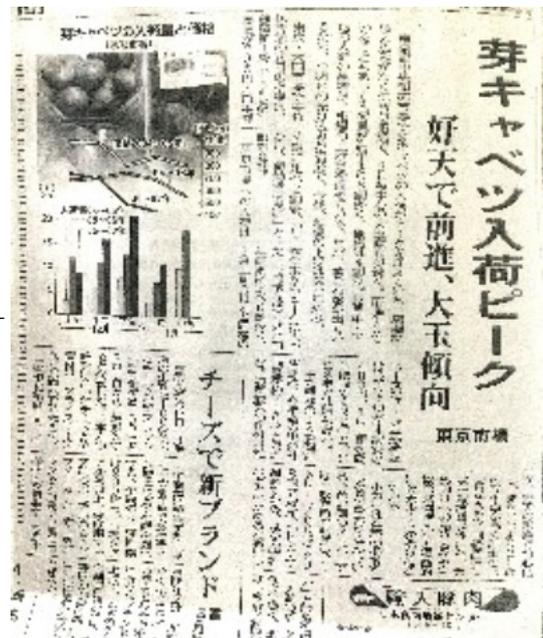
JA全農 いばらき スーパーで食べ方提案

料メーカーの「深煎い」りごまの市場に対してレタスの注文を入れてもらう形とれる」と、利益を確保する。

全農いばらき は「メーカーの商品と連携することで、市場からスーパーだけでなく、スーパー

記者クラブにいた日本経済新聞のA記者の席にそれとなく「ぼん」と置いておきました。目が合ったのでウインクしておきました。彼とは飲み仲間ですが、普段はライバルなので……。日経にも少しのつかって、経済連さんからは感謝されました。

次は、芽キャベツです。江東区錦糸町のスーパーにいったときのこと。マネキンさんという、よく試食販売で、食べさせてくれておいしかったらご購入というのがありますよね？（食べる断れないうつらさもありますが）「レンジで一、二分して



ベーコンと炒めて塩、コショウでおいしいんですよ」と芽キャベツのPRを熱心に野菜の動線の入り口でされていきました。もぐもぐすると確かに中まで柔らかくておいしい。というところで、静岡の経済連さんに聞いて、「今年は温暖で早く多くとれすぎまして、それで、より多くの食べ方提案をしてます」というような話もあったように記憶しております。しかし、キンカン同様、マーケット欄のトップにしたのは「またお前、こりやはじめてだわ」（N編集委員たち）。小さな作物もこうして大きくとりあげると、なん

だかその産地や作物からも「ありがたい」の声をいただけただ感じがするテンチでした。さて、次は芸能の話題。まず別々に芸能とくらしで取材をしました。最初はおスカープロモーションの「グラビア隊」の方がテレビドラマに初出演するのでインタビューをしました。終わった後に



マネージャーさんから、「実はこのグラビア隊に二軍的なPART2があります。彼女らはボランティア活動をするグラビアアイドルなんです。情報だけ」といってパンフレットをいただきました。そして、くらし面用に車いすビリヤードの取材をしました。その役員さんとの雑談の中で、「彼女らを全国大会に来てもらっ

てできる事をしてもらおう」という流れになり、オスカープロモーションに連絡すると快諾！というところでプロデュースすることになり調整役をします。それでイベントにももちろん休日に顔を出して、これもまた当然のごとく「独占取材」ということで記事にしました。

最後は、整理部時代です。会社内で評価が高いのは当然目指すべきでしょう。「あいつの紙面は美しい」「見出しがうまい」など内部ではあります。元々、ミスが0で当たり前で、上乗せできる人は尊敬されると思います。ワタシも先輩の紙面と比較してしまい、数年みじめな思いをしてきました。それを救ったのはギャグ見出しでした。最初は日本の農業の見出しより、

海外の短信写真ものから。タマネギが高くて大変だに「タマネギ高くて涙でそう」。農業ではないけど、ロシアのアシカの調教の写真で「まず左『アシカ』らよ」。そういうところから徐々に社会面

向きの見出しづくりになります。つまり軟派です。そこで鳥取から「どんぐり焼酎」の記事がきて「はまってしまつてさあ大変」とやりました。「どんぐりころころ」の替え歌。それから、愛媛でミカン農家が倒れてリハビリに仏像を掘って地元で評判だ、という記事には「ミカンの合間にはカンカン」。くらしの次長に思いついたときに走って「のみを木にあてる音はカンカンですか？」

「そうじゃないか。なんだ」だっただだと席に戻って、見出し決定でした。翌日には愛媛から電話がきました。地元のJAの広報の方と以後電話することがあつて、「是非、うちの広報紙の指導をしてほしい」と言われたことも覚えてます。

淡々といきます。最後は、整理記者として一番の大仕事だった、協同組合から株式会社になる記念の一面を任せられたということ。そのときに良い意味でデスクから「普通の紙面作つたら

